

伊藤信吉編

島崎藤村

若菜集 春

カラーブック 研 版 明治の古典 全10巻	
1 円朝・黙阿弥 怪談牡丹燈籠 天衣紛上野初花	井上ひさし訳
2 尾崎紅葉 金色夜叉	森 敦訳
3 樋口一葉 たけくらべにござりえ	円地文子訳 田中澄江訳
4 泉 鏡花 高野聖 歌行燈	秦恒平訳編
5 徳富蘆花 不如帰	澤野久雄訳
6 島崎藤村 若菜集 春	伊藤信吉編
7 独歩・四迷 武蔵野 平凡	篠田一士編
8 森 鷗外 舞姫 雁	井上靖訳編
9 夏目漱石 吾輩は猫である	山本健吉編
10 晶子・敏 白秋・啄木 明治の詩歌	谷川俊太郎編

カラーブック 明治の古典 6	若菜集 春 伊藤信吉編	一九八九年十一月一日 第三刷発行	発行人 兎山敬一	発行所 学研(株式会社学習研究社) (千一四五)東京都大田区上池台四丁目四〇番五号 電話 東京(〇三)七二六―八二一(大代表) 振替・東京八―一四二九三〇	印刷所 日本写真印刷株式会社 廣済堂印刷株式会社	用紙 三菱製紙株式会社 王子製紙株式会社 和田製本工業株式会社	製本所 凸版印刷株式会社(包材事業部)	製函所 ※この本の内容・製本などに関するお問い合わせは、左記あて にお願ひします。 文書は(千一四五)東京都大田区仲池上一丁目七番一五号 学研お客さま相談センター 電話は 東京(〇三)七二六―八三四五(人文企画室)	© GAKKEN 一九八九 本書内容の無断転載・複写を禁ず
----------------------	----------------	---------------------	-------------	---	--------------------------------	--	------------------------	--	----------------------------------

明治の古典6

島崎藤村

若菜集 春

伊藤信吉 編

若菜集

冬の凍土を突き破って萌え出した若菜のように、明治の青春をうたった青年藤村の珠玉の詩の数々。「草枕」「初恋」「椰子の実」「千曲川旅情のうた」など、永遠に人々の胸に生きつづける若々しい愛と青春の唱声。

千曲川のスケッチ

小諸在住七年の藤村が、克明に書きつづった浅間山麓・千曲川河畔の風土と人々の生活。花と緑に囲まれた懐古園の春の印象から、野菜も尽きる厳冬の生活、労働する農民のさまざまな姿と、今も目に浮ぶ新鮮なスケッチ。

46

14

6

注釈 千葉眞郎
写真 丸山 勇



春

教え子への愛を胸に漂泊する岸本、人生の闘いに疲れはて自ら生命を断つ青木……。北村透谷を中心とする明治の青年群像と悩み多い青春の日々を回想し、人生に目覚めていく若き日を描いた藤村の自伝小説。

特集口絵 ふるさと・馬籠

評伝 島崎藤村 一つの精神史

解説 藤村の作品世界

エッセイ 染めてぞ燃ゆる紅絹^{もみ}うらの……

エッセイ 島崎藤村と田山花袋

文学風土記 島崎藤村

北小路健 157

伊藤信吉 165

伊藤信吉 171

新川和江 176

瀬沼茂樹 178

槌田満文 180

作品小事典

年譜

千葉眞郎 184

千葉眞郎 186

何ほどの空しい青春の日が(昭和11年刊藤村文庫『早春』より)

荒浜というところは(同)

旧いものを毀^{こわ}そうとするのは(同『千曲川のスケッチ』奥書より)

日露戦争が始まってから(明治40年刊第一短編集『緑葉集』序より)

私は十七から二十までの間を(明治42年8月『明治学院の学窓』より)

初めて『浮城』が出た時は(明治42年5月『長谷川』二葉亭氏を悼むより)

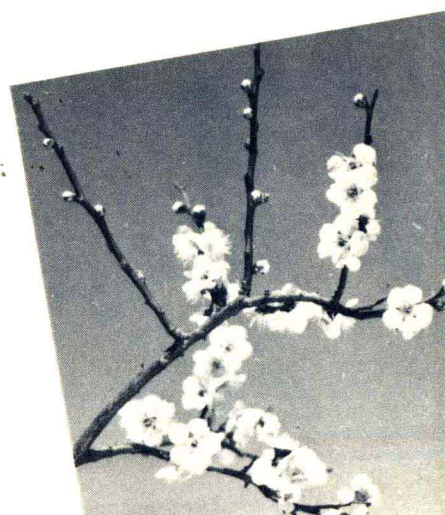
前川村の古い寺は透谷が先祖の(大正10年7月『北村透谷二十七回忌に』より)

早い時代の犠牲者として倒れて行った(『市井にありて』所収『文学界』のことより)

明治三十九年の秋、わたしは(昭和12年刊藤村文庫『春』奥書より)

自伝抄

25 36 60 83 104 104 116 133 150



(50音順)

井上 靖
田 地 文 子
尾崎 秀 樹
山本 健 吉

編集委員

■執筆者

伊藤信吉（詩人）

北小路健（国文学者）

新川和江（詩人）

瀬沼茂樹（文芸評論家）

千葉眞郎（日白学園女子短大講師）

槌田満文（文教大学女子短大教授）

松原常雄（馬籠藤村記念館館長）

三宅正太郎（美術評論家）（50音順）

■写真取材協力・提供

有島暁子 伊藤仁四郎 尾山藤仁 唐沢憲一 木
曾福島・岡本写真館 久留米・石橋美術館 小西
祐典 小諸市立藤村記念館 小諸市立図書館 清
水正行 昭和女子大学図書館 書道博物館 高畠
文子 谷津富夫 東北学院大学図書館 長野県東
部町滋野小学校 名取功男 日本近代文学館 花
岡苗 林勇 堀越真一 馬籠藤村記念館 丸山杏
二 三宅まさ 明治学院大学 和田新（50音順）

■撮影

小塩寿夫 小林幹彦 小平忠生 杉本保夫

■装幀・目次

奥野玲子

■レイアウト

島田拓史

■地図

C A S

■編集スタッフ

（編集） 星瑠璃子 宮下襄 有働義彦 斎藤正憲
岡部佳子

（校正） 河本久慧

■写真取材

鈴木守廣 岸嘉一

■造本管理

酒寄照男 野口元 北川昇

なお、一々ことわらなかったが藤村資料に関してはその多く
を馬籠藤村記念館所蔵の資料に負っている。

若菜集春

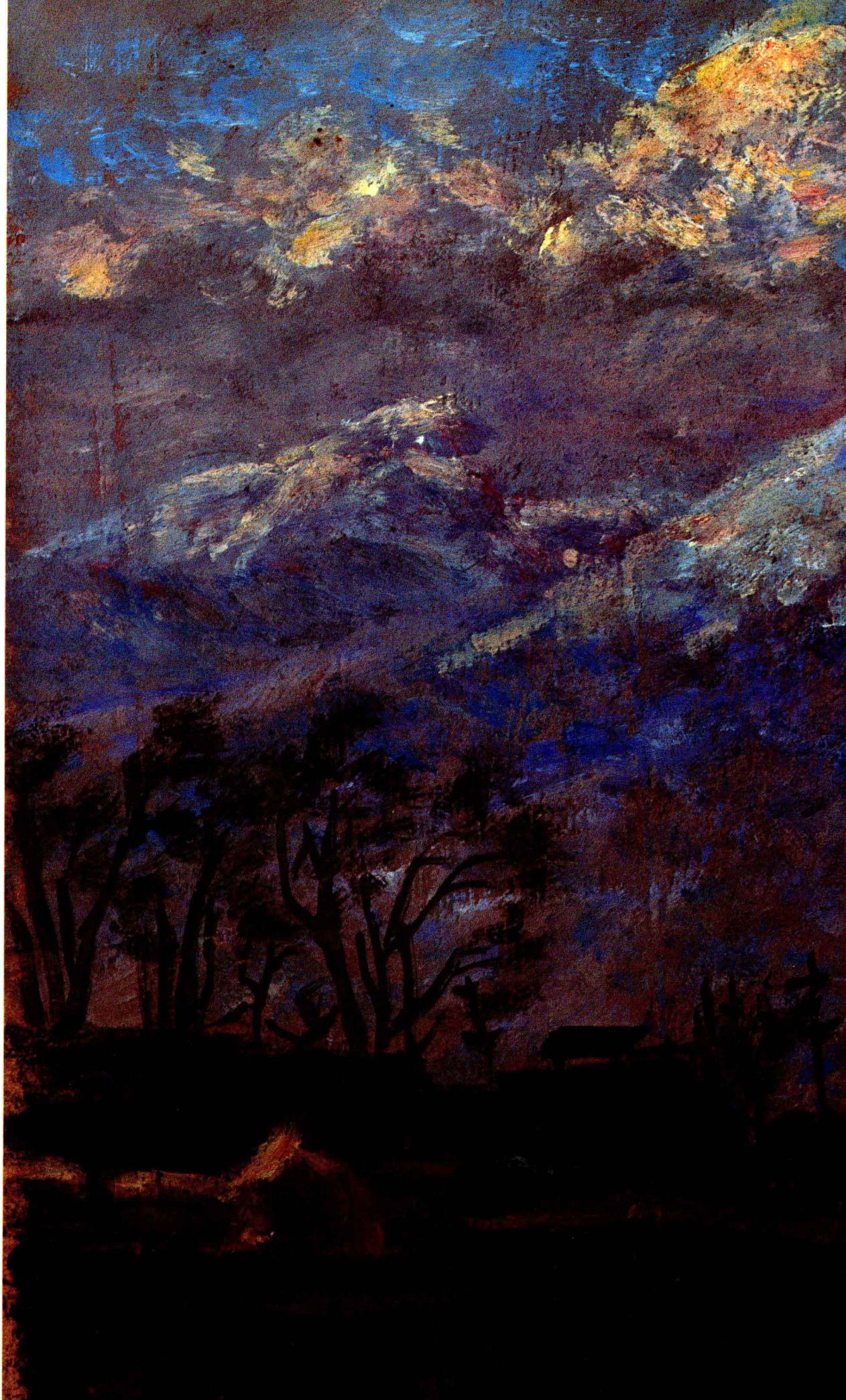
伊藤信吉 編





実際私が小諸に行つて、飢えかわいた旅人のように山を望んだ朝から、私の内部には別のものが始つたような気がした、と藤村は書いている。以来七年間をすごし、藤村の第二の故郷ともいえる浅間山麓。小諸時代から親交のあつた有島生馬が描いたもの。

馬籠藤村記念館蔵





晚霞



布引の懸崖 布引山は小諸の西、滋野にある。山腹にある観音堂釈尊寺では、明治38年、小諸を去る藤村の送別会が行なわれた。藤村と小諸義塾の同僚であつた丸山晚霞の水彩画で、懸崖の下を走る千曲川の河波が、藤村の旅情の思いを奏でているかのよう。

東部町滋野小学校蔵

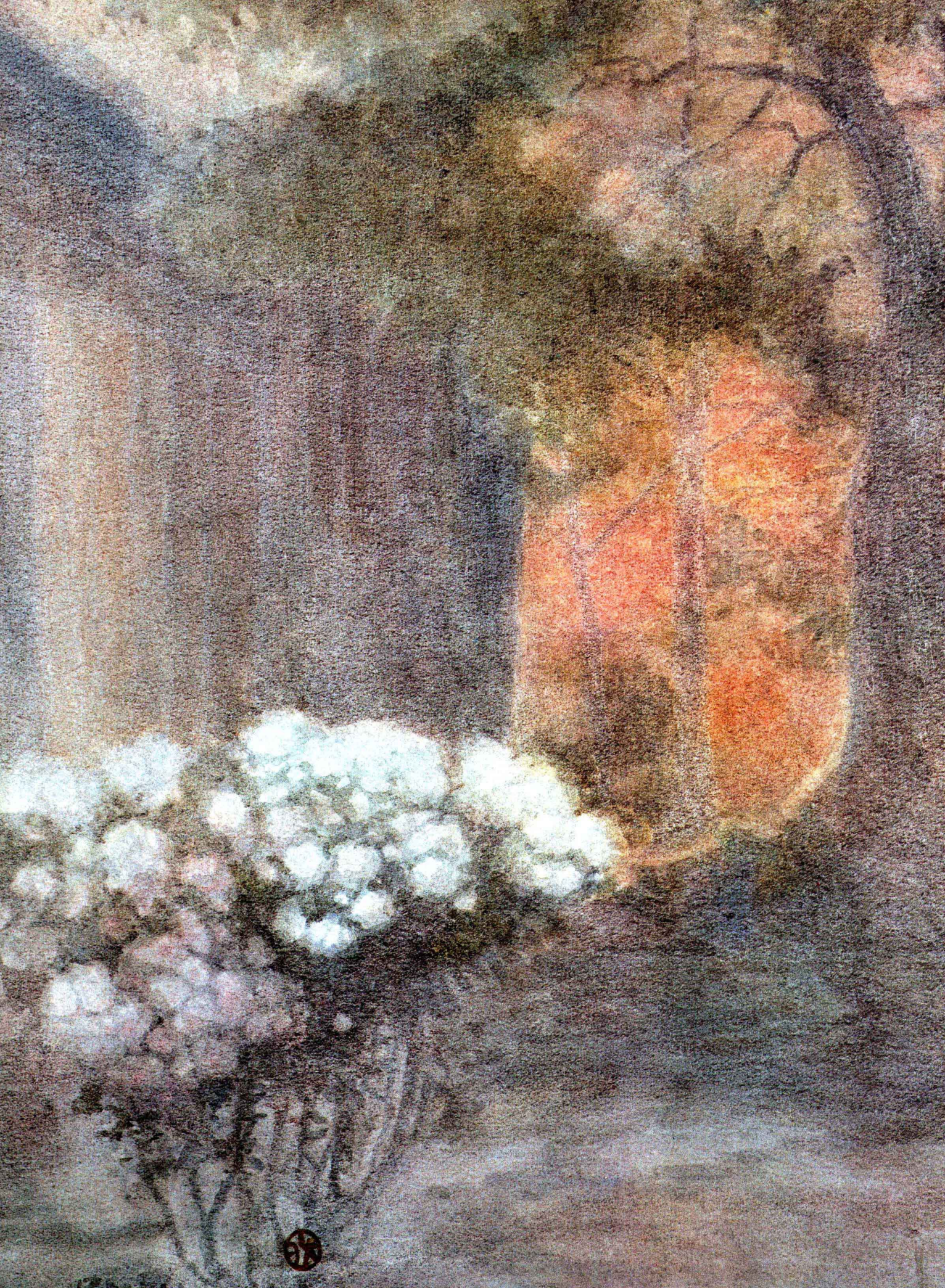




私はよく小諸義塾の鮫島理学士や水彩画家丸山晚霞君と連れ立ち、学校の生徒らと一緒に千曲川の上流から下流のほうまでも旅行に出かけた。千曲川河畔の自然と風俗を観察し、散文精神の涵養に務めた藤村に、小諸近在のこの風景も親しいものであったろう。晚霞画・盛夏の千曲川



BOARUYAMA





丸山晚霞画・夏の夕暮 藤村がよくおとずれた烏帽子山麓・根津村（現・東部町）の晚霞の家の風景。夏の夕暮の一時の陰影。「私はこの画家を訪ねるつもりで、小諸から田中まで汽車に乗って、それから一里ばかり小峠の傾斜を上った。」——。左は山間の村里を描いた晚霞のスケッチ

若菜集



*
おえふ

処女^{とめ}ぞ経ぬるおほかたの
われは夢路^{ゆめぢ}を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河^{やまがは}をながむれば

水静^{しずか}なる江戸川^{*}の

ながれの岸にうまれいで
岸の桜の花影に

われは処女^{とめ}となりけり

都鳥^{みやどり}浮く大川^{*}に

流れてそぐ川添^{かはぞり}の

白堊^{しろすな}さく若草^{*}に

夢多かりし吾身^{わがみ}かな

雲むらさきの九重^{ここのへ}の

大宮内^{*}につかへして

清涼殿^{せいりやうでん}の春の夜の

月の光に照らされつ

雲を彫^うめ濤^{なみ}を刻^きり

霞をうかべ日をまねく

玉の台^{たまのたい}の欄干^{らんかん}に

かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の

耀^{きら}くさまを目にも見て

ときめきたまふさまぐの

ひとのころもの香^かをかぎり

きらめき初^{はじ}むる暁星^{あけぼし}の

あしたの空に動くごと

あたりの光きゆるまで

さかえの人のさまも見き

天つみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて

名の夕暮に消えて行く

秀^ひでし人の末路^{はて}も見き

*おえふ 『若菜集』巻頭を飾った

六人の女性の歌の冒頭。「おえふ」
「おきぬ」「おさよ」「おくめ」「お
た」「おきく」と、若い処女に託
しながら藤村は若々しいおのれの
情感をうたっている。

*越えてけり 夢見がちな人生を自
分も同じように過してきた、とい
う人生行路の追懐。

*江戸川 隅田川の一支流で、早稲
田から小石川・牛込の間を流れる
神田川をさす。

*大川 隅田川下流、とくに浅草辺
から下流を総称する。「三つの長
篇を書いた当時のこと」に、その川
沿いの大川端は「少年時代より青
年時代への種々な記憶のあるところ」とある。後出「春」参照。

*九重の 古来中国では王城の門を
九重にしたところから、王城の修
飾語に、あるいは王城そのものの
意に用いられた。ここでは、紫の
雲が九重に重なっていることと、

大宮（宮中）の修飾語との掛け詞。

*清涼殿 平安京内裏の殿舎の一つ。
「江戸川」の岸に生まれた当時の
若い女性が、この「清涼殿」に宮
仕えするという設定に注目したい。
浪漫的な王朝趣味が、明治の社会